

新島襄先生の“Mr. Spring”と私

桐山恵子

奨励者紹介[きりやま・けいこ]

同志社大学文学部准教授

[研究テーマ] 19世紀イギリス小説、英米文学におけるダンス

春の雨の季節には、主に雨を求めよ。

主は稲妻を放ち、彼らに豊かな雨を降らせ

すべての人に野の草を与えられる。

(ゼカリヤ書 10章1節)

新島襄先生の高校英作文

皆様おはようございます。本日は「新島襄先生の“Mr. Spring”と私」というタイトルでお話しさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

Mr. Springとは誰なのかな、と調べていらっしゃる方も多いかと思いますが、これは新島襄先生がアメリカで書かれた英語の作文に出てくる登場人物です。アメリカでの新島先生の教育機関というとアーモスト大学が有名ですが、大学に入学する前にフィリップス・アカデミーという男子高校で学ばれています。今日ご紹介する文章は、アカデミー在学中の1866年に新島先生が短編小説を意図して書かれたような英語の作文です。ご自身ではタイトルをつけられなかったようですが、便宜上「春さんとの再会」というタイトルで呼ばれています。英語はそう難しくありませんので、英文も織り交ぜながら見ていきたいと思えます。ここから新島先生の敬称はしばらく省略させていただきます。

キャラクターとしての「春夏秋冬」

まずは冒頭ですが、“This morning I met a gentleman suddenly on the road to Phillips Academy”と、朝、新島はアカデミーの授業に行く際に一人の紳士と出会います。紳士は“How do you do Neesima?”と声をかけます。すると新島は“Are you Mr. Spring? ... since I left Japan, I never saw my country-man ... I am more happy to meet you than I can describe.”「春さんですか？私は日本を離れてから、日本人に会ったことはありません。お会いできて言葉にならないほど嬉しいです」と答えます。そして続けて新島が“Where do you board, Mr. Spring? I hope to see you every day.”「春さんは、どこに寝泊まりされているのですか？毎日、お会いしたいです」と言う、春さんは“I can't board here, because I must go round this continent, Asia, and Europe.”「私はここに寝泊まりしているわけではありません。なぜなら私はこの大陸、つまりアメリカだけでなく、アジア、ヨーロッパにも行かなければならないのです」と答えます。それに対する新島の答えが面白いのですが、「そんなに忙しいのですか？」と驚いたあと、「私は1年のうち3カ月の間は春さんにお

会いしていましたが、残りの月は見たことがありません」と述べ、さらに“I thought you were asleep in some quiet secret place.”「1年の大半はどこか静かな秘密の場所で休憩しているのだと思っていました」と言います。

1年の多くをのんびりしていると勘違いされた Mr. Spring は「大間違いですよ!」と指摘したあと、“I am always busy to make provisions for all the nations upon the earth.”「私は地球上のあらゆる国の人々のための準備で忙しいのです」と述べて、半年後には地球の反対側に行かなければならないことを打ち明けます。そして Mr. Spring 本人は立ち去らなければならないが、代わりに別の人が来ると告げます。では誰がやって来るのかというと“[M]y brother Summer will follow me, and complete my work.”兄弟である夏さんがやって来て、春さんがやり残した仕事を完成させてくれると言います。つまり Mr. Spring とは春夏秋冬、四季のうちの春にちなんで創作されたキャラクターだったわけです。

それを受けて新島は、季節における春と夏の特徴を比較し、Mr. Spring に次のように述べます。“[Y]ou are so mild, meek and lovely, but he is very oppressive.”「春さんは穏やかで、温和で、愛すべき人です。けれど夏さんはとても威圧的な人です」。そして新島自身が中国の上海からアメリカのボストンまでワイルド・ローヴァー号で海を渡った際に Mr. Summer がやって来たこと、つまり夏の季節だったことを思い出し、“he [Mr. Summer] came upon us, and teased us so much that we were all over sweat, and sometimes we could not sleep at night.”「夏さんは私たちが非常に苦しめ、大汗をかかせ、時には夜一睡もできなかった」と述べます。フィクションであるはずの英作文の中に、新島が体験した航海での伝記的事実が組み込まれていて、読者にとってはよりリアリティーが感じられます。

春さん、夏さんとくれば、当然ながら、では秋さんと冬さんも存在しているのか、という疑問が浮かんできます。新島が“[H]ave you any other brother?”と尋ねると、“Yes, two brothers more; one called Autumn and another Winter”と予想通り4人兄弟だったことが分かります。続けて新島は「私は秋さんのことは大好きです。けれどいつも青白い顔をされているのが気の毒です。冬さんは数か月前にここでお見かけしましたが、以前よりも鋭い面持ちになられたようです」と、季節の特徴に基づいて Mr. Autumn と Mr. Winter の印象を語ります。

“make provisions”とは

Mr. Spring は新島の素直な感想を聞いて大笑いしたあと、“You must not take their appearances; they all are faithful fellows.”「外見の印象を真に受けてはだめですよ。彼らはみな忠実なる人物です」と言います。そしてここからキリスト教を背景にして物語が進んでいきます。Mr. Spring はすでに新島に対して、世界中の人々のために準備する必要がある、と述べていました。「準備する」と日本語訳した部分の英語は“make provisions”ですが、Mr. Spring は再び同じ言い回しを“God”を主語に用いて次のように話します。“God made us in the beginning of the world, and commanded us to make provisions for all the nations upon the earth.”「神がこの世の最初に私たちをお造りになり、地球上のすべての人々のために準備するようお命じになった」。“make

provisions”には、これから起こるであろう出来事に対して準備する、という意味や、より具体的に、食糧を準備する、という意味があります。Mr. Spring はまずは“provisions”を「食糧」と解釈して次のように述べます。“[T]hough you eat of them bountifully, you shall be hungry after a while, and you will perish after a few weeks.”「あなた方はその食糧を十分に食べても、しばらくすると空腹を覚え、数週間後には死んでしまう」と言うのです。「食糧」を摂取しても生き永らえることができないのなら、どうすればよいのでしょうか。

その問いに対して Mr. Spring は“Therefore you must seek Living Bread, which if you eat once, you shall never hunger afterward.”「食糧」ではなく、“Living Bread”「命のパン」を探し求めれば、その後、飢えることはないということです。「命のパン」とは、ヨハネによる福音書6章 35 節のイエスの言葉「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」に依拠しています。Mr. Spring は、イエスを通して「命のパン」を得るのなら、“Everlasting Life”「永遠の命」も得ることができると説明しているのです。つまり“make provisions”の「食糧」を準備する、という意味には、イエスを通して「命のパン」を受け入れる準備をする、あまねく人々にキリスト教の信仰を受け入れてもらえるように準備する、という意味も含まれていると解釈できます。

このように新島と話していた Mr. Spring ですが、自分が旅立つ間際だったことを思い出し、「私は仕事に行かなければ」と別れを告げます。ここで再度、新島が置かれている現状がフィクションに入り込んでいきます。新島は“When will you go to Yedo in Japan? ... If you should see my father, tell him, Be not concerned for me; I have found very good friends ... and I am very well through the mercy of Him who made the world.”「春さんは、いつ日本の江戸に戻られますか？もし私の父に出会ったら、自分のことは心配しないでと伝えて下さい。良い友達ができ、さらに世界をお造りになった方のお恵みのおかげでとても元気です」と Mr. Spring に伝言を頼みます。そして Mr. Spring の旅立ちを見送ったあと、最後の一文“I went into the Academy quickly because it was the time of morning prayers.”「アカデミーの朝の礼拝の時間になっていたので、急いで高校へと向かった」で物語は終わりを迎えます。

この英作文からは、残してきた家族が待つ日本への郷愁も感じられると同時に、新島先生がいずれは自分も Mr. Spring にならって同じ使命を果たそうと、フィリップス・アカデミー在学中にすでに決意していたことが読み取れると思います。Mr. Spring が去ったあと、Mr. Summer がやって来て、Spring がやり残した仕事を引き継ぎ、次にはまた Summer に代わって Mr. Autumn が、そしてまた次には Mr. Winter がやって来るように、皆で協力して“make provisions”を行おうとしているのです。

英作文から学べること

しかしながら、すべての人が Mr. Spring や新島先生のように強い信念をもって人生を神さまに捧げられるわけではないですし、全世界の人々がキリスト教徒になるということも実際にはないでしょう。他の宗教にも良い点がたくさんあり、それらはもちろん尊重すべきことです。ただこの英作文から、私達一人ひとりが学べることがあると思います。

一人の人間が活着ている間に成し遂げられることには限りがありますし、一生をかけなくても、日々の生活でなにか目標を立てて一生懸命頑張っても、どうしてもうまくいかず失敗することは誰にでもあると思います。そうすると私達は落ち込んだり、絶望したりするのですが、では一度失敗したからといって、今までの努力がすべて無駄となり、成し遂げられる希望は完全に潰れてしまったのか、ということそんなことはないと思います。なぜなら、同じ志をもつ、あとに続く人達が自身の思いを受け継ぎ、未来でそれを成し遂げてくれる可能性に希望を見出すことができるからです。

事実、新島先生は「同志社英学校」の大学への昇格を目指し募金活動に邁進されている最中に亡くなられたので、活着ている間に同志社大学設立の日を迎えることはできませんでした。しかしあとに続いた人たちが、未来でその偉業を成し遂げます。「同志社」の名前は山本覚馬さんが考案したといわれていますが、まさに「同志社」は「同じ志をもつ人が集う場所」だったのだと思います。

同志社と私

私事で恐縮ですが、実は私の両親は同志社高等学校で同じクラスになったことがきっかけで結婚し、その後、私 が 生まれ ました。つまり同志社高等学校がなければ、さらに言う と 新島先生が同志社英学校を1875年に設立しなければ、私がこの世に存在することはなく、2021年の今日、この場でお話しさせていただくこともなかったのです。私自身は同志社女子大学を卒業したあと、大阪大学の大学院に進学し、その後、大学教員となったのですが、いつか同志社に戻ってきたいという思いがずっとありました。新島先生は勝海舟さんに「理想の大学を作るには200年かかる」とおっしゃったそうですが、200という数字は200年たったら、はい完成という具体的な数字というよりは、非常に長い時間をかけて、その時その時で理想的と思われる大学を目指して協力していく必要があることを意味されていたようにも感じます。Mr. SpringのあとにMr. Summerが続いたように、新島先生から連綿とつながってきた同志社の志を受け継ぎ、私も全くもって微力ではあるものの、全世界の人々のためには到底無理ですが、せめて私の周囲の皆さんの幸せにつながるような準備をさせていただいて、そしてそれが自分自身の幸せにもつながればいいなと思っております。このようにチャペル・アワーでお話しする機会をいただけて大変光栄でした。本日はどうもありがとうございました。

註

1. 現代語で読む新島襄編集委員会『現代語で読む新島襄』丸善出版 2000年 65～69頁。なお日本語訳は本書を参照しつつ、適宜、変更させていただきました。

また、引用箇所で前後のつながりのために変更したり、補足した箇所は〔 〕で囲っています。

2021年12月15日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録